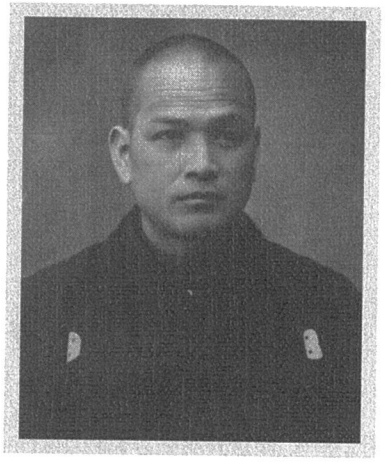
石井十次の残したもの

愛染園セツルメントの一〇〇年



100 Years of
Aizen-en Settlement

（社福）石井記念愛染園隣保館　発行

石井記念愛染園を中心とする草創期社会事業の空間的展開

大阪市立大学・都市研究プラザ　水内俊雄

『石井十次の残したもの――愛染園セツルメントの一〇〇年』
二〇一〇年一一月一日　愛染園隣保館発行　抜刷

●第8章

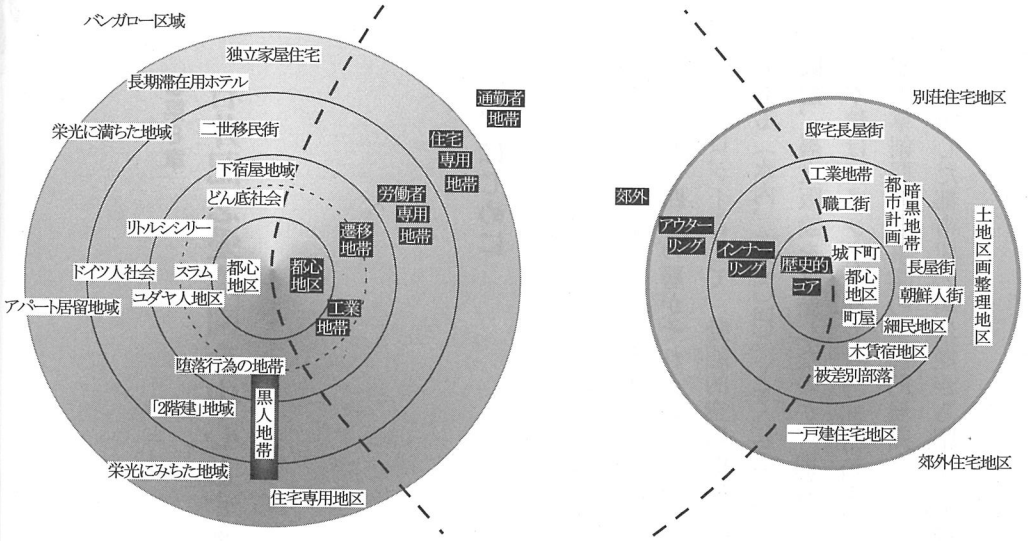
石井記念愛染園を中心とする草創期社会事業の空間的展開

大阪市立大学・都市研究プラザ　水内俊雄

1、はじめに

日本の都市形成のモデルは、大部分、城下町という歴史的核を中心に、一九世紀末から二〇世紀初頭、明治期後半より市街地が同心円状に広がってゆき、①明治期後半から大正期、②昭和戦前期、③戦後復興期、④高度成長期と四つの層がそれぞれの特徴をなした市街地として成長してきた。これをシカゴ学派の同心円モデルのアナロジーとして、動態的空間的に日本の都市形成を捉える視点を、大阪をモデルとして提示したのが図1である（水内、二〇〇四）。とくにこの同心円構造のなかで生まれるインナーリングに着目して、もう一つの大阪論、裏大阪論を披歴したのが、拙著『モダン都市の系譜』（水内ほか、二〇〇八）であった。

本稿は、インナーリングの都市論を、石井記念愛染園（以下愛染園と略）に着目して、明治末期から大正初期の草創期社会事業の空間的展開という観点から展開するものである。特に愛染園の立地の特色と、その立地を規定した都市化の明治期から昭和戦前期に関する状況について、地図を多用しながら空間的に概観する。



パークとバージェスによる
同心円状の都市空間構造

昭和10年代の同心円状の
日本の都市空間構造

図1　同心円状の都市空間構造の模式図

一九八六年に著された玉井金吾ほか編『大正／大阪／スラム』（新評論）は、当時に意識化されていた都市「スラム」の膨張が、大正期に始動し始める大阪市の都市社会政策を生み出したことを、多様な分析角度から明らかにした、近代都市史研究のエポックメイキング的な本であったといって過言ではない。この中で上掲書は、大阪の南部インナーシティの地域変容や、経済・就労、社会構造を描き出しており、特に空間的に、被差別部落、木賃宿街、あるいは不良住宅地区が具体的に論じられたといえる。まさしく同心円状のモデル図の、インナーリングに当たる部分である。かつ地理的にその対象地区の大部分は、現在の浪速区、西成区となっている。愛染園は上掲書が対象にした「スラム」的なエリアの真っ只中に立地していたのであるが、本稿ではとくに、地域としての日本橋、長町、今宮、釜ヶ崎などの空間的系譜についての関係の変遷について留意しながら、南部インナーリングの変容も明らかにしたい。

2、前近代期における都市大坂の空間的系譜

図2は、当該地域を含む江戸末期の大坂の空間的な歴史的系譜を確認するには格好の絵図となっている。集落の基礎ユニットは、長丸で描かれている藩政村であるが、より大きな区画としての、大坂町、摂津国の東成郡、西成郡、そして住吉郡という範域のなかにそれらは含みこまれていた。巨大な城下町大坂に接する周辺地域は、東から南は概ね東成郡、北から西、南にかけては西成郡に囲まれていた。とりわけこの南部地域には、城下町の周辺に布置される社会的周縁的機能が集中的に埋め込まれていたこともその特徴である。

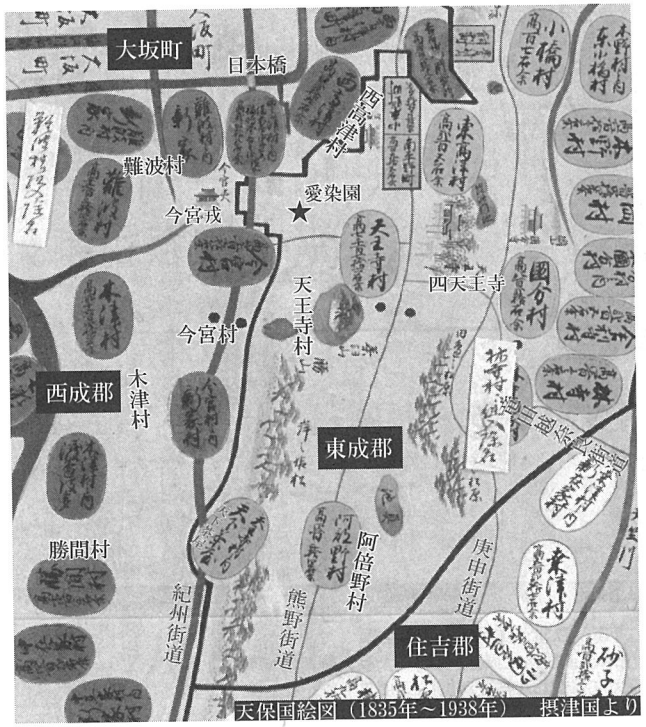


図2　天保国絵図からみた江戸期の大坂南部

また城下町の歴史をはるかに昔にさかのぼる四天王寺の立地と、その門前を支えた天王寺村や、木津村、今宮村、難波村が存在していた。そして庚申街道、奈良街道、熊野街道といったたいへん重要な街道が縦横無尽に走り、南北にのびる林を崖地とし、その東側の上町台地は、難波宮からはじまる遣隋使、遣唐使時代からの古代の港難波津と深く関連し、そして時代は

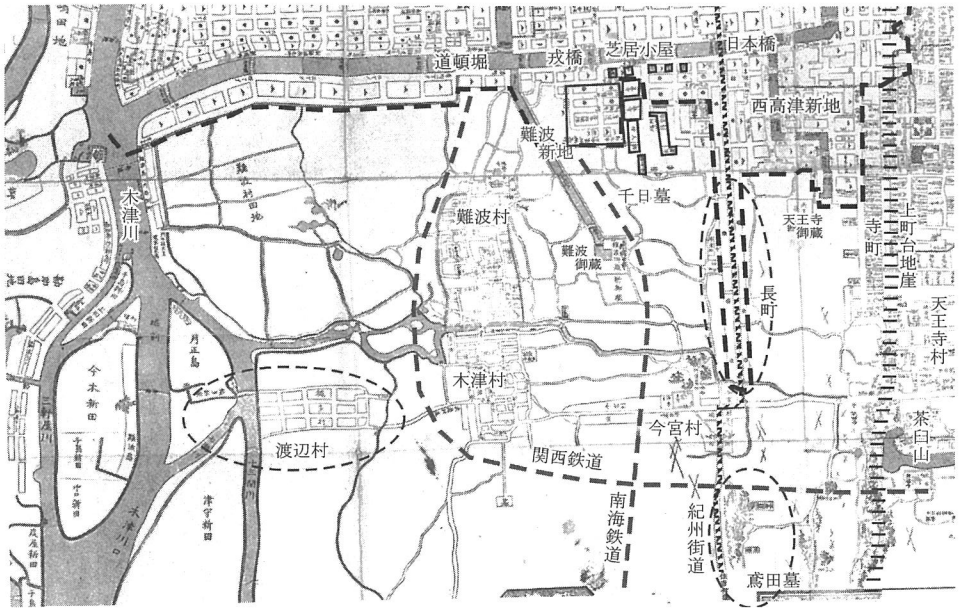


図3　19世紀初頭の大坂南部
1806年刊行「増修改正摂州大坂絵図全」（大阪人権博物館特別展示図録『絵図に描かれた被差別民』2001年所収）に加筆

下って、石山本願寺の大寺内町、と数々の日本のナショナルな歴史が展開する。この上町台地は、大坂町の東部、東成郡、住吉郡と南北にのびていたのである。そして上町台地の西側、一部、東成郡や住吉郡を含む形で、大部分の西成郡は、茅渟の海に接する低湿地から海辺としてひろがっていた。

もう一つ重要な空間的系譜は、近世この地は、大消費地大坂町を控えたきわめて生産力の高い蔬菜生産地であったことに見出される。天王寺蕪、勝間南瓜、難波ねぎ、田辺大根がその代表であり、野菜は大坂町内、天満の青物市場に持ってゆくのが決まりのなかで、自前の市が木津村方面にでき、一八一〇年に官許の木津市場として登場する。その後一九一三年に難波青物市場と木津魚市場が合併し、木津難波魚青物市場となる。西成郡の難波村、木津村は綿作に加え、まさしく近郊野菜の大産地でもあり集散地でもあった。そして物流は、発達する街道や河港都市大坂とも直結しながら、きわめて旺盛であった。

さて、その周縁的機能を有した施設の立地につい

ては、図3を参照してみよう。結論から述べると、浪速区、西成区の空間的系譜は、前近代大坂の都市構造に規定されている部分がある。それは城下町が計画的に有していた身分的周縁社会の地理的な周縁空間への固定であり、城下町大坂の南部はそうした仕組みが極めて強く埋め込まれている場所であった。一般に城下町はその見事な身分的すみわけが計画的に施行されたが、周縁身分でいうと、穢多、非人からなる被差別部落民でありその居住地としての部落、あるいは施設の立地として、遊廓、それとほぼ同義的な新地、芝居・諸芸小屋、墓場、刑場、木賃宿街がそうした事例に相当していた。

大坂の都市絵図において、もっとも「最大・詳密」であるといわれる一八〇六年の「増修改正摂州大坂絵図全」をベースに、いわゆる被差別表現を一切抹消せずにそのまま掲載した状況に加筆したものが図3である。城下町大坂の南限は、北部の道頓堀のすぐ南に太破線で記している。真ん中には一七六四年に新地造成された遊里の難波新地があり、道頓堀と記した南側には、歌舞伎や義太夫の芝居小屋街、そしてその南には、難波村抱えの千日墓、刑場、長吏、非人集落が存在する。またその東には、日本橋から住吉街道（あるいは紀州街道）沿いに南にずっとのびる木賃宿街の長町が存在する。この部分が城下町大坂で公認の木賃宿指定地区であり、城下町エリアに含まれる特異な市街地形態を示す。この住吉街道は、城下町の南淵を、鼬川にかかる名護橋をわたって今宮村内に入る。村内で街道は少し屈折するが、南に伸びる住吉街道のすぐ東側には、再び七墓のひとつの鳶田墓、そして刑場が現れる。そしてその刑場には非人小屋が存在する。上町台地崖を東にのぼると、この図幅で範囲外となっているが、城下町の空間的コンテクストとは別個の、よりはるか昔より存在する四天王寺の悲田院系統の非人小屋がまた立地する。

一方、目を今宮村の住吉街道屈折部から西に向けると、その道は木津村の村中を通り、大坂城下町周縁に位置する大きな規模を有した被差別部落の渡辺村に至る。その区画だてられた集落には、絵図では穢多村との表

記で描かれている。十三間堀川を隔てて、月正島には穢多新家、そして難波島には刑場がまた記される。加えて、難波御蔵とそれに接続させるために掘られた難波入堀は、一七三三年、今でいうところの失業救済事業、当時の救恤事業として施行され、その姿を当地に刻印したことも頭に入れておかねばならない。

愛染園は、既述の鼬川が東に延びるところから、北からの高津入堀が堀止めとなっているちょうど田んぼが広がるところに後に位置することになる。東成郡天王寺村の村内であった。問題の焦点は、たしかに周縁的施設が集中する地域であったが、愛染園の立地する数十年前の江戸末期にはただの田んぼの地域であった。一体その後どのような市街地化が進むことになったのであろうか。

3、明治期に入っての大阪市南縁地域の変化

図4は、一八八一年測量の一万分の一の実測図であり、この時点での市街地化の様子が見事に見て取れる地形図である。小字名も印されており、後に愛染園の立地するは、天王寺村大字天王寺小字夜橋と記され、上町台地上の愛染さんの名前で知られる勝曼院、大江神社からは七坂のひとつ、愛染坂を下りて、日本橋筋の新宅に向かう田んぼのあぜ道が描かれている。その坂の下から見る光景は、写真1であり、振り返ると字夜橋のほうに抜けてゆく。これを日本橋筋のほうから望むと、写真2のように上町台地上に新清水寺からはじまる寺院群が見え、写真3では、合邦辻から逢坂の坂道が右手に、そして右から一心寺、安井天神、新清水寺が上町台地上に見て取れよう。日本橋筋には、うなぎの寝床たる屋敷区画が描かれ、木賃宿街が明治期になっても道筋に長く延びる形で、周囲の田んぼの中に目立つ形で引き続き存在していることも確認できる。

図5は一八九五年刊行の地図となる。一八八五年敷設の阪堺鉄道（一八九八年より南海鉄道）が難波から南に、

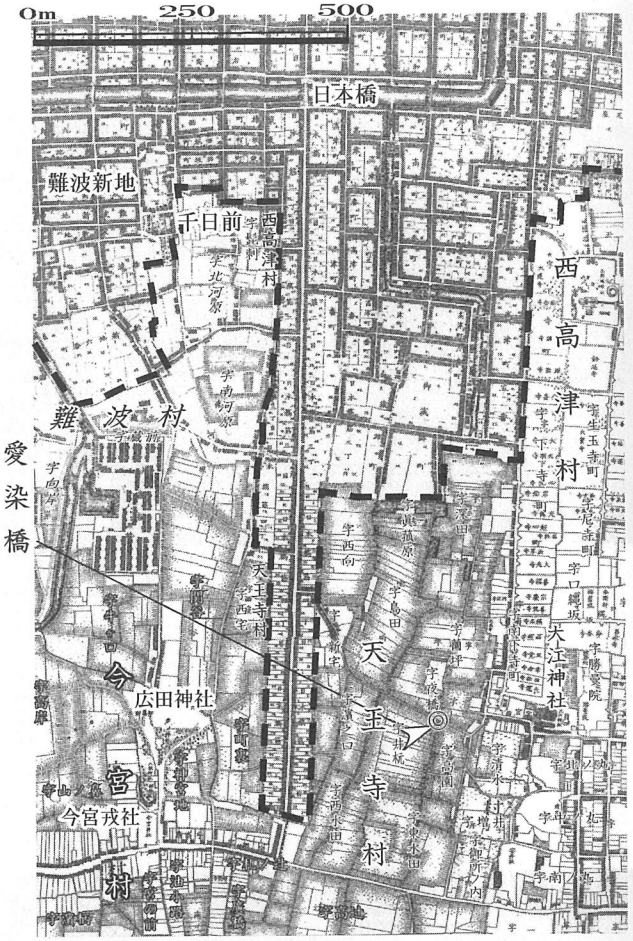


図4　明治初期の日本橋筋を中心とする市街地化の状況と地名（小字名）　内務省地理局製版「大阪実測図」1887年に加筆

そして一八八九年敷設の大阪鉄道（一九〇〇年より関西鉄道）が湊町から天王寺方面に登場し、日本橋筋に変化がみられることになる。そしてこの図に描かれている今宮商業倶楽部は、一八八九年にサロンとパビリオンを併せたような集客施設として、この南部大阪に登場する。その後の博覧会場や新世界に登場につながる嚆矢となった。わずか一二年後の一九〇一年にこの倶楽部は取り壊された。この跡地は、直後の一九〇三年、第五回内国勧業博覧会場となる今の恵美須町交差点の東南の地にあたった。写真4にみられるように、現動物園の敷地内から商業倶楽部の建物、そして遠くには難波の通称「五階」の眺望閣が望めるその地は一面、田圃の広がる状況であった。同様な光景が、後に愛染園保育所などが建設される小字夜橋にも広がっていたのである。この図5では、日本橋筋の西側には、関谷町にあたる街路と街区が新たに登場し、また東側には、日本橋東筋ができ、日本橋筋との間に街区ブロックが出現する。この時期に市街地化が進行し始めた状況が描かれているが、日本橋東筋より東

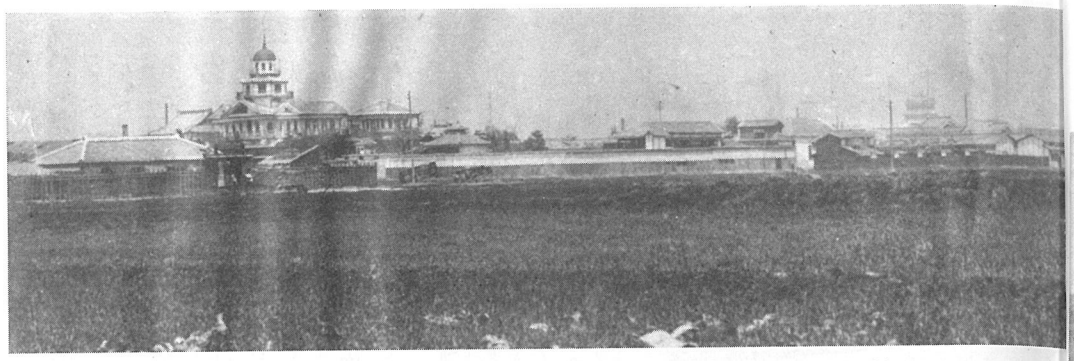


写真４　現動物園前から現新世界方面をのぞむ、今宮商業倶楽部と難波の眺望閣
上田貞治郎写真コレクション（大阪市立大学都市研究プラザ管理）

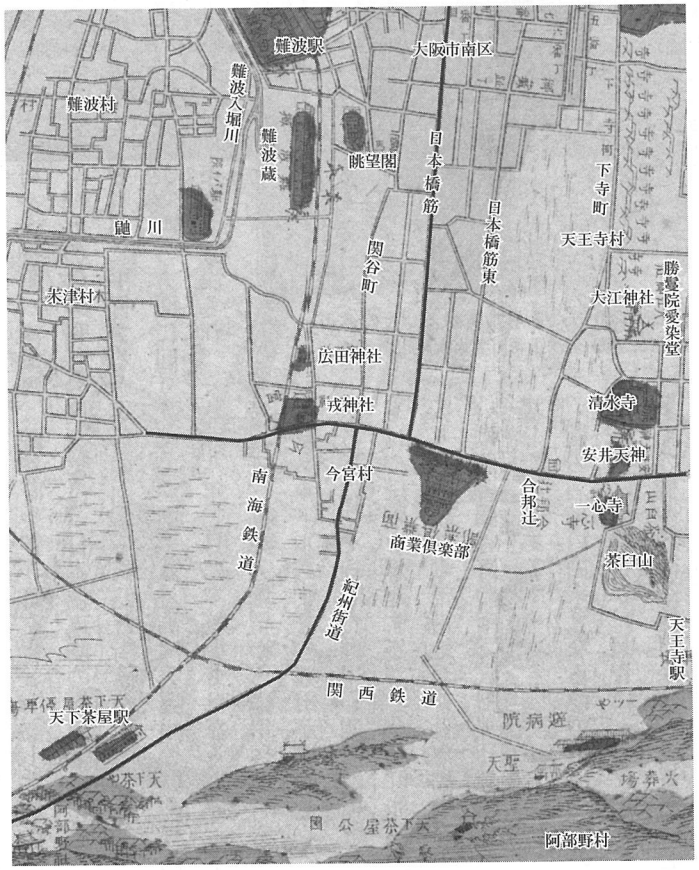


図５　1895年刊行地図よりみた日本橋筋およびその近辺
大阪市明細地圖

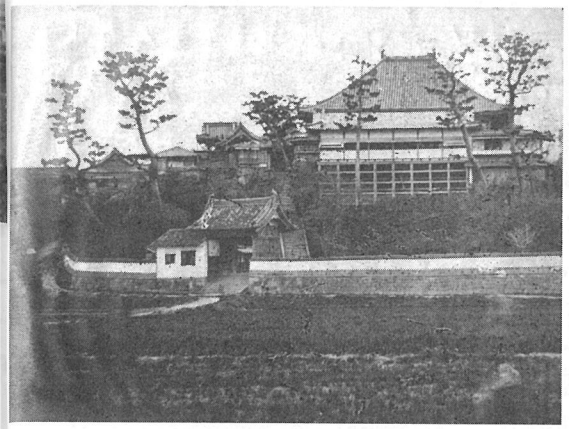


写真１　大江神社坂下より
上田貞治郎写真コレクション（大阪市立大学都市研究プラザ管理）

写真２　新清水寺をのぞむ
上田貞治郎写真コレクション（大阪市立大学都市研究プラザ管理）

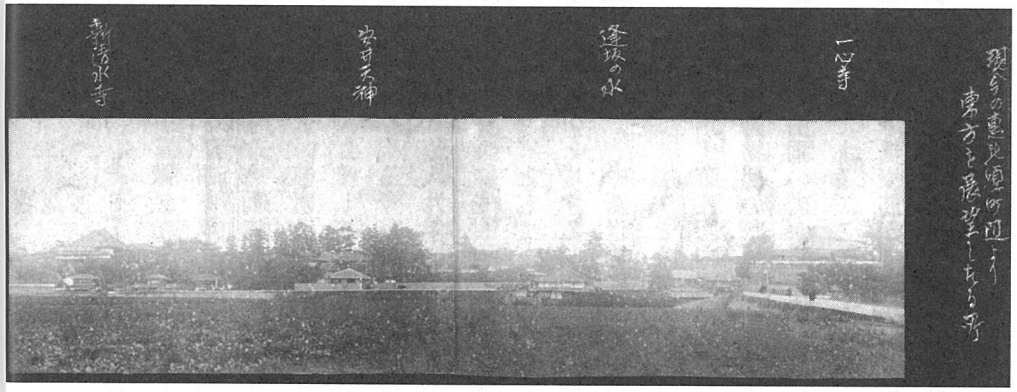


写真３　現在の恵美須町より東方をのぞむ。右の道路は逢坂、合邦辻付近。
上田貞治郎写真コレクション（大阪市立大学都市研究プラザ管理）

側はまだ田んぼのままとなっている。

ところが二年後の一八九七年、当該地区は、大阪市の第一次編入で大阪市南区となり、小字名は一斉に新町名に変更される。今になじみのある、恵美須町や大国町、南霞町、関谷町や下寺町など、一部小字名も使われながら大部分は新しく命名された町名となる。一九〇〇年刊行の図6では、日本橋東筋の東側では、そうした屈曲したあぜ道は消失し、同時に登場する下寺町筋に平行する、矩形で画する街路と街区が登場することになる。これは高津入堀から南に、鼬川が南の恵美須町の方面に回りこんで開削される高津入堀川の開削にあわせた耕地の整理と関係する。一八九四年八月に市会で議決され、一八九八年二月に、暗渠ではなく舟運・水利を考えて、高津入堀留から鼬川へ通じる一・八キロメートルあまりの堀川が完成する。この図6では、そうした堀川の開削が描き込まれ、もはや田圃を想起することが不可能な路地が入り組む密住の市街地が、日本橋東筋、あるいは西の関谷町の南、広田神社かいわいに登場したのである。

園の名前の由来となる愛染橋は、この一八九八年に架橋され、図6にみられるように、多くの橋の名前が鼬川から高津入堀に記されることになる。後の下寺改良アパートの地となる八十軒長屋が一八九五年に建設されたと

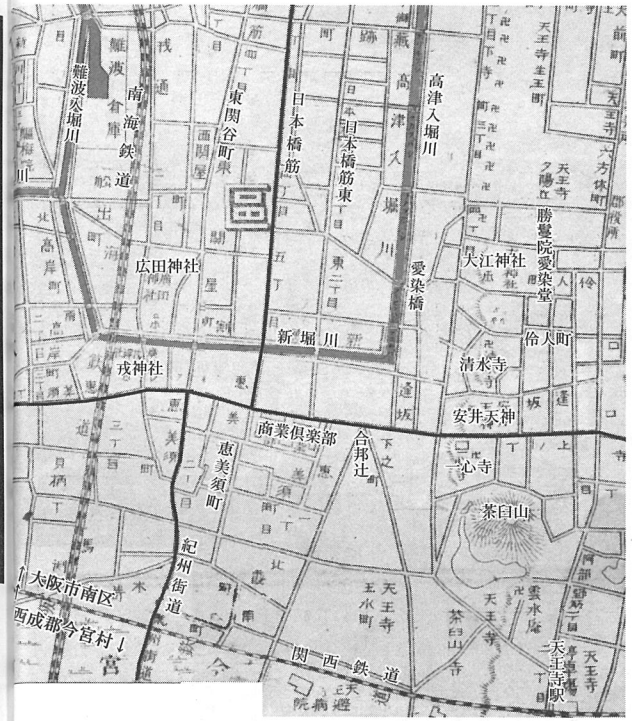


図6　1900年刊行地図よりみた日本橋筋およびその近辺
新町名入大阪市街全圖 or 改正新町名入大阪市新地圖

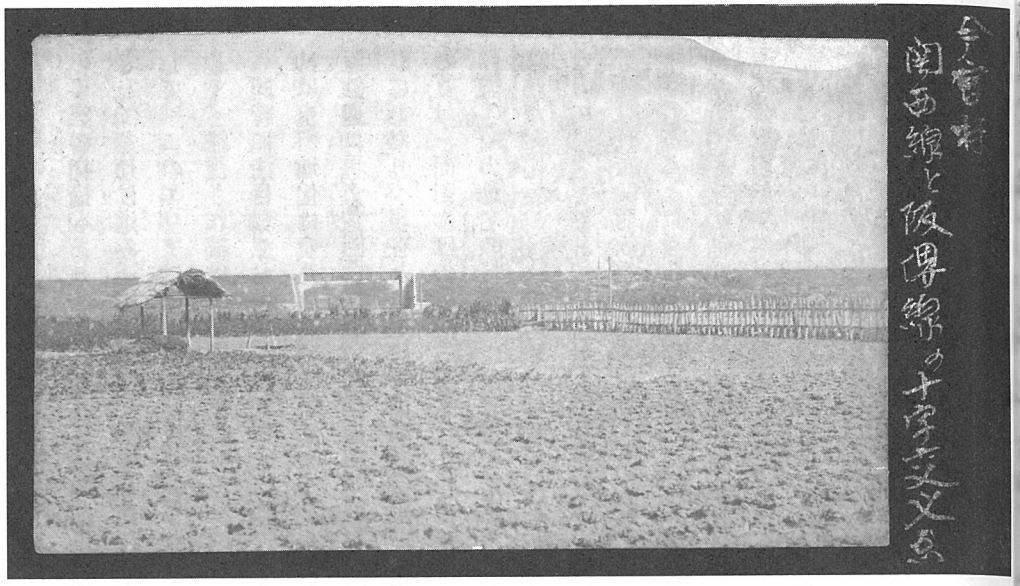


写真5　明治20年代初期の現在の新今宮駅の光景
上田貞治郎写真コレクション（大阪市立大学都市研究プラザ管理）

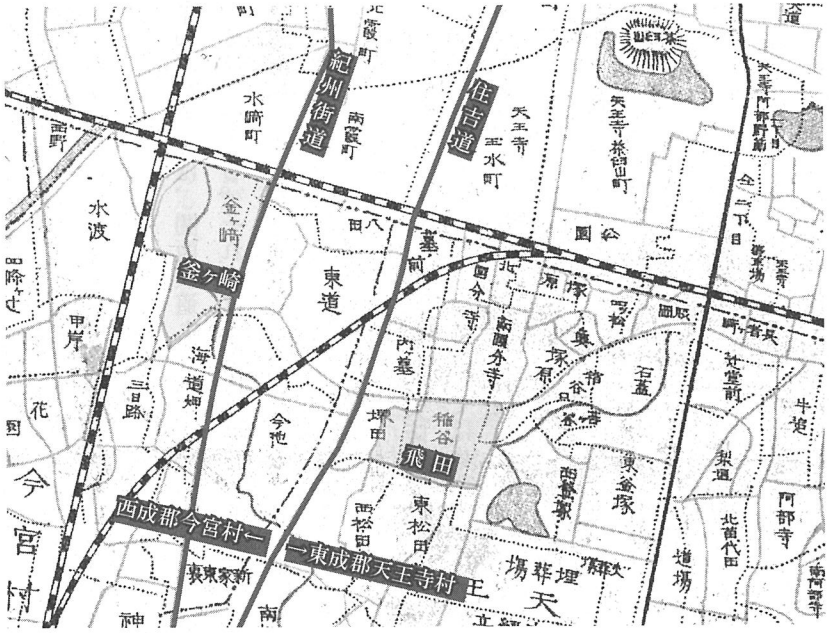


図7　1911年の地籍図よりみた日本橋筋から釜ヶ崎方面（小字名を中心に）
吉江集画堂地籍地図編集部編『大阪地籍地図全三編』、吉江集画堂、1911年

の事実の指摘もあり（佐賀、三〇八頁）、市街地はこの一八九〇年代に、新しい高津入堀川の開削を大きな契機として急速に進み、明治三〇年代の初頭には市街地化はこの地域において密住状態で仕上がったのである。そして、このエリアは横山源之助に代表されるようなルポルタージュ、そして細民調査の幾度もの調査対象地として、注視され続ける空間となる。

同時に注目しておかねばならないのは、一八九五年の図5までは、関西鉄道より以南のいわゆる釜ヶ崎地区には市街地化は全く起こっていなかったことも地図上で確認できる。それより以前に撮られたと思われる、大阪鉄道（現ＪＲ関西線、大阪環状線）と阪堺鉄道（現南海電鉄）の交差地の写真5は、現在のＪＲ・南海新今宮駅にあたり、現在とは逆に手前に高架以前の地上を走る阪堺鉄道を築堤状の大阪鉄道がそれをまたぎ、そのまわりは一面田んぼの広がる光景となっていることがわかる。

釜ヶ崎の地名の経緯について少し補足しておきたい。関西鉄道以東は一八九七年の大阪市内の新町名がつけられたに比し、村域を南北で分断された西成郡今宮村大字今宮（藩政村では今宮村）では集落部分は恵美須町などの町名となり、今宮村大字木津（藩政村では木津村）では、大国町などの町名が数多く登場した。そして分断された関西鉄道より南側は、図7のように、小字名がそのまま新しい今宮村や新しい天王寺村に多く引き継がれることになる。紀州街道にそって関西鉄道の築堤を抜けるトンネルをくぐり、西成郡にはいって、南に向かって右手の西側に釜ヶ崎、海道畑と続き、左手の東側に八反田（八田）、東道、今池と小字名が続く。かつての鳶田刑場は、小字東道に属することになる。

また逢坂の合邦ヶ辻から南に折れて延びる道路は、東成郡と西成郡の郡境ともなり、四天王寺からの住吉道とも呼ばれた。この道も関西鉄道を越え、西成郡天王寺村域に入ると、西側に小字名、八反田（八田）、東道、今池と続き、東側は墓の前、内ヶ墓、堺田と続く。鳶田墓に由来する小字名がみられるとともに、堺田は東接

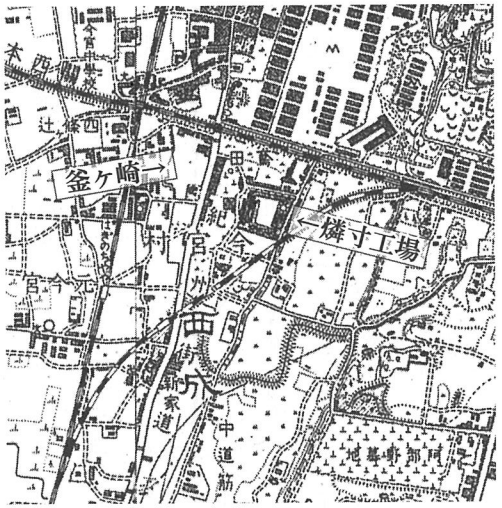


図8　1909年地形図からみた日本橋筋から釜ヶ崎方面
2万分の1地形図「大阪西南部」1909年測図

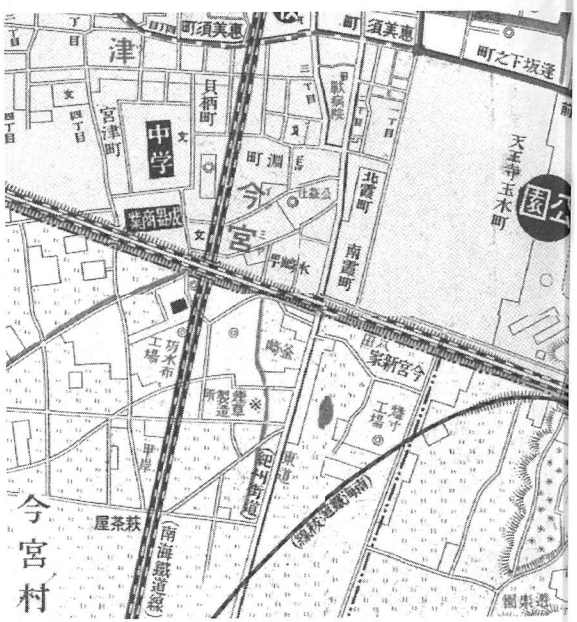


図9　1911年刊行地図からみた日本橋筋から釜ヶ崎方面
實地踏測大阪市街全圖より

する稲谷と合わせて、後年の一九一八年に飛田遊郭が建設される区画になる。

この関西鉄道以南について、掲載はしていないが市販地図上では、一九〇二年に初めて市街地が今宮新家という名称で住吉街道の東側に現れるが、これはマッチ製造の電光舎が一八九六年にこの地に進出したことによる市街地化の結果として位置づけられる。一九〇九年の地形図である図8では、その今宮新家部分は、燐寸工場をとりまく市街地として描かれ、そして一九一一年刊行の市販の図9では、燐寸工場として記されることになる。同時に釜ヶ崎という地名が登場する。図8、9とも電光舎およびその周辺にみられる住宅（社宅）は明らかに確認でき、小字名で、上述した図7の東道に当たることになる。地形図では公式地名としては存在しなかった鳶田というかつての墓場／刑場名がその名残として描かれている。もうひとつ小字甲岸に広がる市街地

では、一九〇七年進出の煙草製造所とそれに関連する建築物であろうと思われる市街地化が見られる。

釜ヶ崎の成立史は、日本橋筋方面の市街地化とその状況ときわめて密接に結び付けられて考えられてきた。研究史上、釜ヶ崎形成に必ず触れられる一九〇三年の第五回内国勧業博覧会の開催は、それにともなう見物客をさばくための日本橋筋の拡幅にともない、木賃宿は移転を余儀なくされ、一八九八年の宿屋営業取締規則により、移転先は市域外と指定された。日本橋筋がそのまま南に続く紀州街道沿いで、市境となった関西鉄道の築堤を越えた西成郡今宮村大字今宮小字釜ヶ崎、八反田（八田）、東道が移転地となるのは自然の成り行きであった。最も古くこの地に営業を始めた木賃宿は、一九〇四年くらいに日本橋筋から移転してきたと言われている。

図10は、一九〇九年当時の大阪市をとりまく状況を表した地形図である。江戸時代の木賃宿、一八八六年の宿屋取締規則での指定地、そして上述の一八九八年の規則での指定地の関係を示しているが、江戸時代の立地からその近接地への移転は、自然の成り行きであり、南の今宮村大字今宮、北の豊崎村大字本庄が最も近接した指定地であったが一目瞭然となろう。後者は今宮より少々遅れて、北の木賃宿地区となることは周知の通りである。

さて南の日本橋と今宮、釜ヶ崎の木賃宿街の関係とその経緯については、本書では加藤論文に、そしてそれのもととなった加藤氏の著書（加藤、二〇〇〇）、加えて一連の吉村智博氏の研究で詳しいのでここでは詳しくは触れない。拙論文（水内、二〇〇一）でも明らかにしたことは、釜ヶ崎の成立は、博覧会の開催によって日本橋の「スラム」が強制移転させられて生まれたものであるという今までの理解は正しくないということである。本稿が主たる対象としている日本橋筋の東西両側の後背エリアについては、既述したように、「スラム」と称され続ける当該エリアのその「スラム」たる密住状態が、一九〇〇年までの一〇年間に瞬く間に生まれた

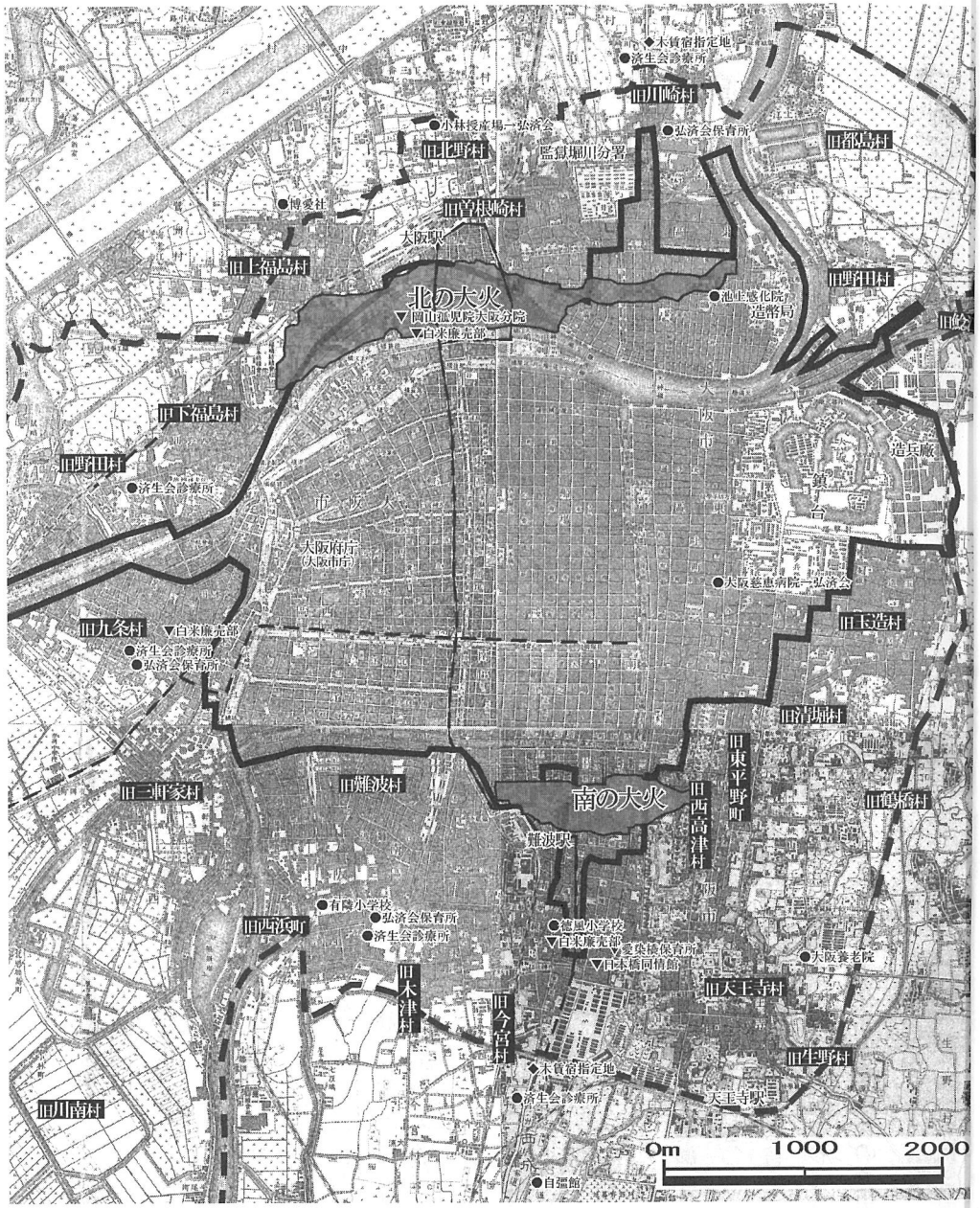


図10　明治末期から大正初期の市街地化状況といわゆる救済事業の展開
2万分の1地形図「大阪西北部」「大阪西南部」（いずれも1909年）「大阪東北部」「大阪東南部」（いずれも1908年）

のである。それより南、関西鉄道を越えた今宮村では、少し遅れて、一八九六年に創設の電光舎を核にして、職工たちの住む棟割長屋による市街地化が最初となったのである。関西鉄道以南の市街地化の最初であったと言える。そしてもうひとつの系譜として、一九〇四年ころから始まる日本橋筋から移転してきた木賃宿主による、木賃宿を核とする釜ヶ崎の形成が、電光舎からすぐ西、紀州街道を挟んで隣接する小字釜ヶ崎、東道ではじまった。この今宮の地の市街地化には、二つの系譜があったといえ、日本橋筋の「スラム」が移転して、釜ヶ崎に「スラム」が形成されたという単線的なストーリーは正しいとは言えない。

さらに確認しておかねばならないことは、釜ヶ崎の成立以後の、釜ヶ崎の「スラム」と、この日本橋筋・長町の「スラム」の社会的構成の違いである。佐賀が指摘することであるが、日本橋筋・長町の密住地区は、「家族持ち世帯とそれが取り結ぶ共同関係を主体としながら、同時に居住をめぐる……住友家を含めた地主層を頂点とし、家主、表店居住層、裏店の下層住民、という形での階層構造をその特徴とした。……こうした下層住民の職種は、屑物関係のような下層労働を中核としつつも、一部に近代的な工場労働を含」（三三五頁）んだ地区として、釜ヶ崎とはある種異なる社会構成を持っていたという事実である。この近接するふたつの「スラム」、そして西接する被差別部落を核としたその隣接地域との本格的対比は、その後の社会政策的な展開の相違も含めて、今後の研究に待たれるところである。

4、岡山孤児院大阪分院の設立と愛染園の周辺地域

少々長くなったが、愛染園が立地した日本橋筋を中心とした、釜ヶ崎まで視野に入れた市街地形成の空間的な特質を指摘してきた。何よりも冒頭に述べたように、工業化、資本主義化の都市化が、前近代の歴史的コアの周りに同心円状にインナーリングとして形成されていることが、近代都市化の最大の特質であった。特にこのインナーリングの都市化の特質は、工都、移民都大阪という色相をもっとも濃く反映するエリアであり、日本スケールで語れば、工業化に牽引されて市街地化が物理的に進んだ日本で最初の事例であると言っても過言ではない。またそれだけ、近代の都市問題が最も早く集中的に起こった地域でもあったのである。そうした状況が、愛染園のインナーリングへの立地をもっとも合理化せしめたのであり、その経緯を、愛染園のみならず、明治末期から大正期にかけての勃興する他の社会事業（当時の救済事業）との比較をも加味して、以下で探ってみたい。

愛染園の設立までの経緯については、本書菊池論文に詳しいが、石井十次の運営する、岡山孤児院の大阪分院として一九〇七年一月に設立される。図10のように、梅田の出入橋東詰という、北部のインナーリングの只中に事務所を構える。院児の就労先の開拓や寄付金募集のために、かつ近代都市化の中で勃興する貧困問題の解決の必要性のために、この出入橋の地で大阪事務所を開設したと言えようか。救世軍的な根拠にもとづくセツルメント活動を大阪の地で展開することを求めていた。これは岡山での孤児院の運営を通じた孤児の救済をはるかに越えた多様な活動を目指していたようである。

一九〇九年には、石井は精力的に、大阪の神戸の「貧民窟」を訪れ、保育所、口入所や学校の開設の構想を練り、その七月には、友愛社（北区曽根崎新地三丁目）を設立、愛染橋保育所（南区下寺町四丁目）、日本橋同情館（南区日本橋通五丁目）をその傘下に位置づける。友愛社は、保育所や夜学校と同情館を管轄し、同情館では、職表紹介や代筆などの業務を行うことになる。しかしその直後の、七月三一日の北の大火で、大阪事務所が全焼してしまう。

一九一二年になると、白米販売部南支店は、愛染橋保育所の近くで営業を始め、その後、西区九条町二丁目

に西支店、出入橋の大阪事務所には北支店が併設される。その後日本橋筋に西接する関谷町支店も開設される。その分布は、図10を参照すれば、急速に市街地化するインナーリングの只中にあったことが読み取れる。その後一九一四年に石井は逝去するが、大原孫三郎が実質的に運営のキーパーソンとなり、上述の運営施設の整理統合を経て新事業を興す方向で、新しい体制が提起されることになる。

一九一六年、大阪事務所は、岡山より独立し、まさしく愛染橋の西詰に新事業を展開するための準備がはじまり、九月に事業名を愛染園とすることが決定される。南区下寺町四丁目四六八八番地に置き、あわせて、救済事業研究室を設置し、新たな貧困問題が大阪市のインナーリングで都市問題として発生するまさしくその坩堝たるエリアで、実践と、調査研究というスタイルで新しい事業に取り組むことになった。ここで、託児事業、夜学校を中心とするセツルメント事業で、冨田主事夫妻を中心に、愛染園は、大阪の社会事業の代表的なもののひとつとして形成されてゆくことになる。

この施設立地のありようは、ヘッドクォーターが長らく大阪駅の直近、出入橋に置きつつも、日本橋筋を活動空間として収斂してゆく状況を示してくれている。大原孫三郎の特設秘書としても位置づけられる柿原政一郎は、当地の情景を想起させる興味深い回想を残している。（柿原著『石井十次』日向文庫、一九五三年、二一六～二一八頁）。

「石井先生が大阪に蒔いた種々の種子の中で、最もよく繁茂し、今日まで生きているのが、愛染園である。第一場所柄が相応しく、名前も何となく床かしい。天王寺境域の外廓高台に愛染明王廟がある。其の下の小さい堀に架っているのが愛染橋である。明治四十二年夏四十五歳の時、石井先生初めて此処を視て、すぐ気に入った理由の一つも、其の名であったらしい。……愛染橋の下は、いつも暗黒な色をした濁泥で、メタン瓦斯の匂が鼻を衝く。」

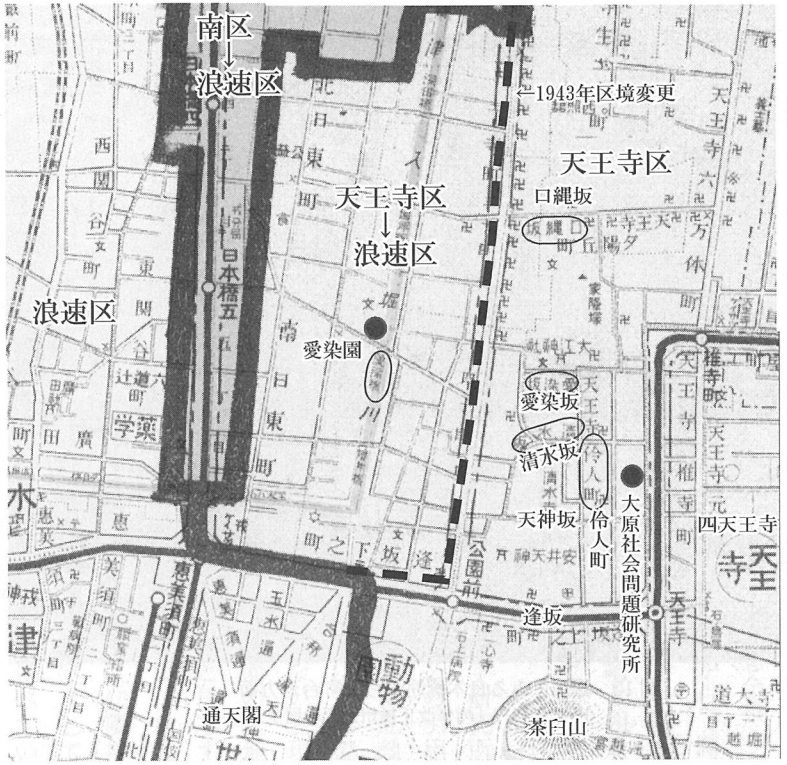


図11　1925年刊行地図よりみた日本橋筋から上町台地方面
大阪市街大地圖より

一方研究機関のほうは、同居が無理となり、独立すべきものとして、愛染園救済事業研究室から大原救済事業研究所、そして大原社会問題研究所へと伸展してゆく。洋館スタイルで建築された研究所は、場所的にも同じ天王寺区とはいえ、図11にみられるように、愛染園のある愛染橋から東に南北に走る下寺町の通りを越え、愛染坂を上がって、上町台地上の伶人町に設けられた。もちろんこの風情ある伶人町という町名は、一八九七年の天王寺村大字天王寺小字中ノ丸（町名西小儀町）から大阪市南区に編入された時に、四天王寺があるため、かつて伎楽を踊る人たちが住む町という謂れをもとに新たに付されたと言われる。加えて、大原社研の案内パンフレットにある「敷地の沿革」をみると、「本研究所の敷地は、もと小野院秋野坊と称し、四天王寺と密接なる関係を有する、……小野妹子が其の守

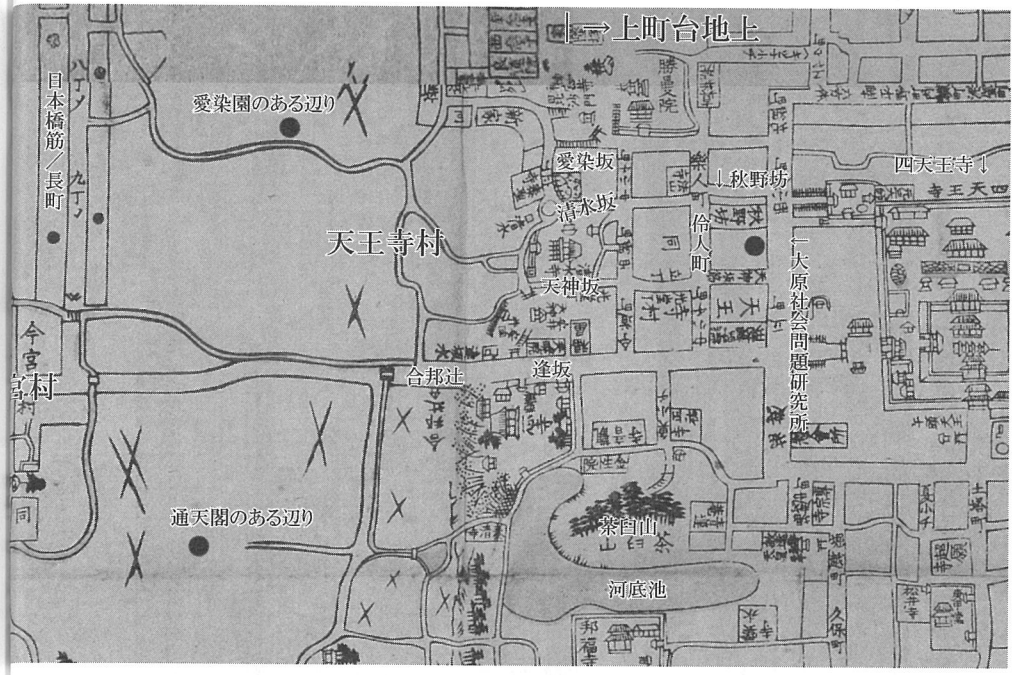


図12　絵図にみる日本橋筋から上町台地方面
1806年刊行「増修改正摂州大坂絵図全」より

護職に任ぜられて、一山の寺務を執った政所する著名なる史蹟」と紹介される由緒ある跡地でもあった。その由緒は図12の江戸末期に描かれた絵図から見て取れよう。

この上町台地の崖地の東西は、社会階層的にも劇的な変化の起こるところであり、低地のほうは大阪最大の「スラム」と呼ばれ、上町台地のほうは、大阪一好適で高燥な住環境を誇る夕陽ヶ丘とも呼ばれる上町筋沿いの閑静なエリアであった。図10で示したが、一九四三年に、この地理的崖地と社会階層差の違いをも考慮してか、天王寺区の低地部分は、浪速区に編入され、あわせて日本橋筋の南に延びていた南区のエリアも、その地理的同質性から、ここも浪速区に編入されることになる。その意味で、一九四三年からは、研究所は天王寺区のままであったが、愛染園は浪速区と別区となる。

この上町台地の崖地をはさんで両拠点があることに関して、高橋彦博（一九九九）は、興味深い

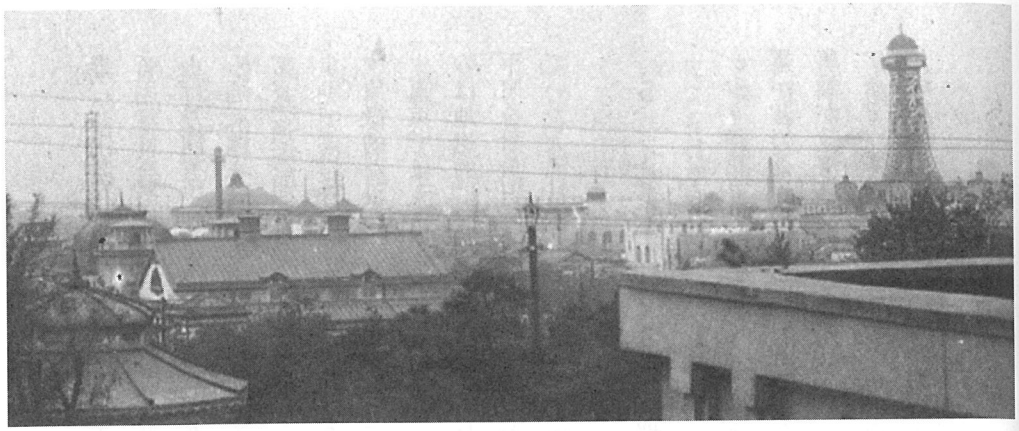


写真6　天王寺美術館から通天閣をのぞむ
上田貞治郎写真コレクション（大阪市立大学都市研究プラザ管理）

解釈をしている。大原総一郎が、「石井十次先生の生涯と思想」（『大原総一郎随想全集・1』福武書店、一九八一所収）のなかで、釜ヶ崎と対比させながら、両施設を空間的に位置づけている一節を引用している。「石井先生の愛染橋の保育所は……大阪市天王寺の通天閣をはさんで、釜ヶ崎と相対しています。この施設は、石井先生の死後、石井記念愛染園となって石井先生の意思をついで、現在も社会事業を続けております。この石井記念愛染園の中で大原社会問題研究所が生れ、更に労働科学研究所が発足したのであります。」

高橋は、この引用の後に、石井が一九〇九年に大阪の南の日本橋筋東側の愛染橋に立地した三年後に通天閣ができているので、「『天王寺の通天閣をはさんで……』の一語は、いろいろな意味で誤解を生む総一郎らしくない表現であった」、としているが、「セッツルメント・石井記念愛染園の立地点について、大原総一郎が、生活困窮者が多い地域であったと活写することの意味は明らかではなかろうか。大原社研発足の地となった天王寺区の伶人町は、高台ではあったが、大阪の南の日本橋地区に隣接する地点であった。大原社研の愛染園からの分立は、地点設定としては、下町との完全な分離を意味していなかったのである」と述べている。

冒頭で述べたように、上町台地には、創建者聖徳太子以来の四天王

寺、悲田院、施薬院などのいわゆる救済事業の長い歴史があり、空間的にも天王寺悲田院系の鳶田垣内に連なる周縁社会の空間的系譜を有している地でもあった。愛染橋からは少々南に位置したところから上町台地を見上げた四天王寺にほど近い写真3にみえる高台に研究所は立地した。また研究所からほど近い天王寺美術館から通天閣を見下ろす写真6は、その逆の高低の位置関係を示してくれている。高橋氏は、この位置関係について、「通天閣を見下ろす地点、ただし、通天閣を常に視野に入れる地点である天王寺の高台が大原孫三郎によって選定され、大原社研がそこに設営されたということは、社会問題研究の起点と原点がどこにあるかを示す象徴的なロケーションになっていたと、総一郎は読み説いているのであった。」と解釈する。

東京では大正期になり、本所・深川などのセツルメント活動がさかんになるとともに、山の手と下町というのは地形的に区別されていた。しかしこの愛染園と研究所の地理的近接性には及ぶべくもない。上町台地崖の下町を対象とした「貧困」研究の現場との近接性を東京に比し圧倒的に有していた山の手の上町台地に位置していた大原社研も、残念ながら一九三七年に東京に移転する。

5、インナーリングに立地する救済事業の胎動

少々詳しく、愛染園を中心にその草創期の展開を見てきたが、歴史的に同時進行的に大阪市全体で同種の事業がどのように行われていたかを概観してみたい。この時期、社会事業というタームの登場以前であり、救貧事業が救済事業という形で、一八七四年の「恤救規則」ではとても補えない部分を、地方行政が初めてイニシアティブを取って動き始める都市状況が、大阪市で先鋭的に見られたと言える。いわゆる自助的な慈善事業としての民間の動きは、この愛染園の前にもいくつか起こっていた。再び図10を参照しながらその展開を述べてみたい。

個人的な動きとしては、池上雪枝による、非行少年の教護事業ともいえる池上感化院（北区空心町、一八八三年～八六年）、小林佐兵衛による、行き場のない老若男女を保護し授産事業をおこなった小林授産場（西成郡北野村、一八八三年～）、小林勝之助・実之助・林歌子によるキリスト教信仰に基づき貧しい家庭の子どもたちを育む施設を運営した博愛社（西成郡大仁村一八九四年～→西成郡神津村十三元今里一八九九年～）、岩田民次郎による日本で四番目に設立されたといわれる大阪養老院（南区天王寺勝山通、一九〇二年～）などがあげられる。いずれも救済事業前史の大変な個人的な営為であり、池上感化院はわずか三年であったが、小林授産場は後述する財団法人弘済会に引き継がれ、大阪養老院、博愛社は現在にもその社会福祉事業を継続して行っている。

こうした前史において、一九〇七年大阪に進出した岡山孤児院→愛染園は、本格的な救済事業の嚆矢のひとつと位置づけられよう。同時にここで触れておかねばならない動きは、一九〇九年七月の北の大火の義捐金により一九一二年に、府市連携・協調、大阪朝日、大阪毎日両新聞社などをバックにして財団法人弘済会が設立されたことである。小林授産場と大阪慈恵病院（東区粉川町、一八八八年～）を吸収し、保育から福祉医療にわたる事業に公的に取り組んだ。

大阪毎日新聞（一九一二年六月一三日）の報道によれば、サービスの対象者は、北区火災罹災者及軍人遺族家族、棄児・孤児及貧児、老衰者、浮浪無頼者、行旅病人などとされており、計画では、「救貧病院を新築して、市外天王寺付近、窮民収容場 同上 救貧病院内併置、あと第一保育場 玉造町又ハ東平野町付近、第二保育場 三軒家町又ハ九条町付近、第三保育場を日本橋東一丁目又ハ下寺町四丁目付近、第四保育場 関屋町又ハ木津北島町付近、第五保育場 西野田又ハ北野、本庄付近」とし、インナーリングの核心地帯が、候補地として選ばれていた。実際、同会は、一九一三年には、南区木津北島町、西区九条南通、北区天神橋筋東の三カ所に

乳児のいる女工用の昼間保育所を開設した。

他にも、後の大阪市長、池上四郎は大阪府警察部長時代に保安課長の中村三徳に命じて一九一二年に東成郡天王寺村天下茶屋に簡易宿泊所をベースにした大阪自彊館を作らせた。後に初代社会部長となる天野時三郎も難波警察署長時代の一九一一年に、夜間二時間の授業を行い修業年限は六年となる、徳風小学校（南区東関谷町）、有隣小学校（南区木津北島町）を開校した。前者は、久保田鉄工所社主久保田権四郎、後者は難波署内の富豪である新田帯革製造所社主新田長二郎を説いて作った私設夜学校であった。

大阪府的には、大久保利武知事と、一九一三年に府の救済事務の指導監督のヘッドとして招聘した内務省嘱託小河滋次郎を軸に、同年に大阪府救済事業研究会が設立され、雑誌救済事業が創刊される。発会式席上、大久保利武大阪府知事は「大阪の地は商工業殷盛の土地柄なる丈け、将来社会問題の起るは到底免るべからざる数なれば、今にして斯業を研究して之を実地に施し、以て全国に於ける斯業の模範たらしめざるべからず」という認識を披露している（『救済研究』一―一、一九一三年）。

インナーリングに対する都市問題の坩堝としての認識であり、当時の池上四郎市長や、助役として一九一四年に赴任した関一のそれとも共通していた。この後は、米騒動直後の一九一八年の方面員制度の創設や、北部インナーリングの代表的なエリアである長柄での館長志賀志那人率いる北市民館の一九二一年の設立と続く。そして本格的な都市社会政策が、一九二三年より市長に就任した関一によって進められることになる。

また被差別部落においても上述の弘済会や、恩賜財団済生会などの民間の社会事業団体の事業のなかにも実施され始められていた。済生会の施薬救療事業は一九一二年からはじまり、一九一六年の時点で、済生会直営の今宮、西浜、九条、西野田、本庄の五カ所の診療所が設けられていた。西浜診療所などは、被差別部落でのサービス展開であり、その他の診療所のインナーリングの代表的エリアとして診療所が設置されている。一九

一七年の米騒動を経て、大阪府や大阪市に救済課や社会課・社会部などが設置された後、社会事業という一般対策を超えて特別対策としての部落改善事業（地方改善事業）に着手するのは、一九二〇年に入ってからである。

6、小括

愛染園を中心とする本稿第4章での事業の空間的展開、そして愛染園からさらに広げて、救済事業の勃興から社会事業への展開期についての第5章では地名を付して叙述を進めてきた。こうした事業や施設の展開をプロットしたものが図10である。一九〇七年の地形図を基図としているので、一九一七年の米騒動までの市街地化が反映されていない。しかしいわゆる当時の救済事業の空間的展開は、ものの見事にインナーリングに集中していることが見て取れよう。

米騒動以降、本格的に大阪市の社会事業が始動し、その施策のターゲットエリアが愛染園を中心とする日本橋筋地域や釜ヶ崎、西浜地区に集中することは、拙著（水内ほ

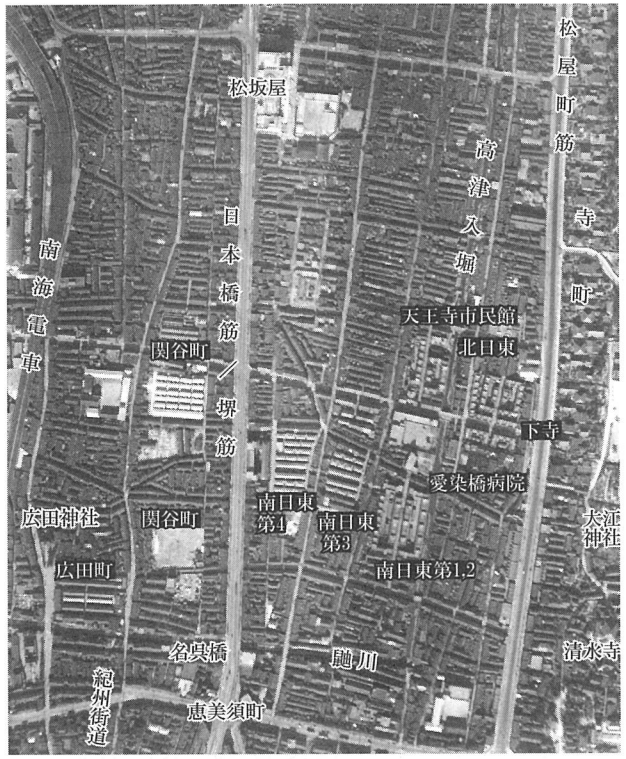


図13　1942年撮影の空中写真からみた改良住宅建設後の状況
大阪市立大学都市研究プラザ管理

か、二〇〇八）の第五章で地図を用いて述べた通りである。本稿の分析対象時期外なので、これ以上は触れないが、昭和初期の当該地域の様相が見てとれる貴重な写真と空中写真でもって、本稿を閉じたい。

図13は、不良住宅改良事業が戦時中での中断を迎えた一九四二年に撮影された空中写真であり、日本で最大規模の不良住宅改良事業が行われた当該地区の、戦時における事業中断直後の進行状況を確認することが可能である。また写真7は、改良事業がおこなわれる直前の当該地域の長屋の状況と、写真8は完成直後の白亜の下寺アパートと、上町台地を遠景に寺町の寺院群をその手前に見る角度で、愛染園の北隣の日東小学校の屋上から撮影したものである。大阪市では最初の、日本では第二番目の不良住宅改良事業が、愛染園を直近のエリアにて行われたわけであるが、明治中期以降、大阪の代表的な細民と目されていた人々が密住するエリアへの、昭和初期の実験的な住宅改良であった。工事中の立ち退き者用仮設住宅としてしかし本格的な造りの鉄筋アパートが、釜ヶ崎のど真ん中に今宮アパートとして建設されたことは、釜ヶ崎への戦前のほぼ唯一というインフラ整備型の公的施策と注目しなければならない。しかしその政策意図は資料的には明らかにはされていない。

写真7　下寺第一アパートの改良工事以前の長屋の状況
写真8　同上、完成直後の状況　いずれも大阪市社会部『不良住宅地区改良事業概要』（1937）より

この写真は、一九三七年に撮影されているが、愛染園では病院経営が始まった年でもある。改良アパート地区での隣保活動や北日東アパートに設けられた天王寺市民館の活動とも合わせて、大正後期から昭和戦前期の愛染園の活動状況や地域の変容については、また稿を改めたい。

参考文献

高橋彦博「大原社会問題研究所創立前史の記録」大原社会問題研究所雑誌四九二、一九九九年
吉村智博「近代都市大阪と『釜ヶ崎』——一九〇〇～二〇年代の都市下層社会」部落解放研究一七一号、二〇〇六年
吉村智博「日傭労働者街『釜ヶ崎』の木賃宿——法規則と止宿人の生活実態を中心に」大阪人権博物館紀要一一、二〇〇八年
吉村智博「近代初頭の『釜ヶ崎』」大阪人権博物館紀要八、二〇〇四年
水内俊雄「メディアに描かれた釜ヶ崎——大阪西成区釜ヶ崎の批判的歴史地誌」人文研究五三-三、二〇〇一年
加藤政洋『大阪のスラムと盛り場——近代都市と場所の系譜学』創元社、二〇〇二年
佐賀朝『近代大阪の都市社会構造』日本経済評論社、二〇〇七年
水内俊雄・加藤政洋・大城直樹『モダン都市の系譜——地図から読み解く社会と空間』ナカニシヤ書店、二〇〇八年
水内俊雄編『空間と社会』朝倉書店、二〇〇四年